

東北大学附属図書館報

木這子



BULLETIN OF
THE TOHOKU UNIVERSITY LIBRARY

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

このページは
著作権処理の都合上、
ご覧いただけません。

電算化業務（目録・閲覧）の現場から

〔目 録 業 務〕

隣のブックトラックが気になるこの頃

和漢書目録掛 松 井 好 次

目録システムが Case 2 業務モードに移行したのは6月初めであったから、それから早くも5ヶ月がすぎようとしている。その間9月24日には書誌の数が1万件の大台に達し、データ量も着々と増加している。10月31日現在、書誌の総数は13,067件で、冊数では16,000冊ほど整理したことになる。ちなみに10月中の処理状況を見てみると、書誌の増加数が2,649件、整理冊数3,230冊であり、これは1日平均（平日を1日、土曜日を0.5日で計算）にすると、書誌は約115件、整理冊数は約140冊となる。前の月の9月と比べると、1日当たりの書誌の数は7件ほど少ないものの、整理冊数は10冊ほどふえており、目録システムも徐々に軌道にのりはじめたと言える。

目録が電算化されて大きくかわったことは目録カードから解放されたことである。週1,000枚も送られてくる国会カードの組込みもなくなり、ガシャンガシャンの和文タイプや今日の御機嫌はどうかなのカードコピー機から解き放たれた。より嬉しいのはヘボン式の読みを脳裏にえがきながらカード組込みをしなくても済むようになったことである。ディーイは dui かな、jui だったか、はたまた dyui だったかな…。「日中…」、「日米…」、「日独…」、「日英…」、「日中…」、ん？。「日本の公害」、「日本農耕技術」、「日本の工業」、「日本の公企業」、「日本農耕社会」、「日本の皇室」…う〜ん？？。

電算化によってこれらから解放されたが、反面システム入力に伴う別の難しさが出てきた。それは検索語の入力であり、分かち書きである。大部

分はシステムが自動切出ししてくれるが、それをチェックし不足分を追加するのは、なかなか大変な作業である。これをおろそかにすると折角つくったデータが検索の役にたたないという最悪の事態を招く。したがってスペルミスなどは絶対許されない。また分かち書きも頭を悩まされるものの一つである。「運輸小委員会議録」、どこにスペースをいれるか、それが問題である。こういうとき学術情報センターのマニュアルが非常につれないと思うのは私だけであろうか。

しかしいつもこのような時だけとは限らない。うれしい時もある。その一番は隣で目録登録している人のブックトラックに、自分でこれから登録しようとしている本をみつけた時である。そういう場合はさりげなくその本の登録を見合わせ、隣の人の登録が終わるのを待つ。なんとならば複本登録の場合、入力するのは資料番号と所在コードだけで済み、面倒な検索語入力や分類をしなくてもいいからである。時間にしてほんの1分とかからない。この頃、みんなが互いのブックトラックをよく観察しているように感じるのは気のせいであろうか。

電算化の会議や研修、講習会等で図書の整理が一時大巾に遅れ、電算処理開始の6月には例年の半年遅れという数字が出ていた。が、それも9月には新年度の図書の整理が開始され、今のところ遅れも大部取り戻したように見える。いま悩ましいのは、システムで処理をしない中国書の山が日々大きくなっていくことである。

〔閲 覧 業 務〕

開架カウンター雑感

図書館業務電算化の第一走者となった閲覧管理システムも、本年4月開始から7ヶ月余りを経過しました。当初は機械操作も覚束なくキーの押し間違い、押し忘れなど、ミスの連発に冷汗の毎日でしたが、習うより慣れろで近頃漸く落ち着きが出て来たというところでしょうか。

閲覧業務の中では、学生用図書（開架）の貸出・閲覧業務を受持つ開架カウンターは比較的システム化された部分で、利用者の反応は、電算化された現場には目もくれない人、便利になったと感心する人、端末機の画面に興味を持ってしっかり見つめる人等、様々あっても、貸出手続が軽減されたという点では、電算機導入は大方歓迎されているのかなと思われます。一方従来の各図書毎に図

関 覧 掛 京 極 菊 子

書借用証を記入していた時と比べて領づける情況も現われています。例えば「現在借用中の図書は何冊か」とか「何という図書を借りているのか」とか「返却期限をオーバーしている図書は何か」という本来貸出者自身が記憶すべき筈の事柄についての問い合わせがしばしば寄せられるのは一体どうしたことでしょう。機械が情報を与えてくれるという安心がそうさせるのでしょうか。又係員側からの不安要素としては貸出返却の事務処理は簡潔、スピーディになった反面機械的処理に追われ、最近よく利用される図書とかリクエストの傾向がつかみにくくなって来ているのが気にかかるところです。

電算化元年閲覧日誌

関 覧 掛 米 沢 誠

某日、書庫内和雑誌の電算貸出望む院生あり。現在雑誌 Data 準備中にて残念ながら借用証に記入願う。来年には電算可とならん。電算貸出の簡便さ利用者に浸透せり。

某日、研究室利用の資料五十冊、十分間で処理せり。借用証記入なれば一時間はかかると思ゆ。恐るべし電算。

某日、利用証紛失せる学生あり。本日二件目。本館分館に通用するものなれば学生証と同様大事に扱うべし。亡失せし利用証、即時に無効にする。

某日、借用証での貸出望む教官あり、借受記録を保管したいとのこと。記入不要の紙なし System の裏面。電算貸出を受けた後、御自分で借用証等に控えてはいかがであろうか。

某日、延滞者の一覧表作成、極めて簡便なり。罰則かかるを知りつつ延滞するもの甚多し。延滞

をなくし資料の回転を早くするが我々の務めなり。

某日、利用者資料を請求すれど書庫に無。懸命なる調査の後、目録作成直後である事判明。利用者、端末を検索せしとの事。目録情報提供の早き紙なし System 恐るべし。

某日、夏期休業中につき狩野文庫・漱石文庫の閲覧者多し、同僚奔走す。かくのごとき電算外業務多々あり。電算により軽減されし労力これらに向け、利用者 Service 向上に務むべし。

某日、TAINS なる学内 LAN System の計画を耳にする。これらの紙なし System 浸透し、電算機にて論文等を提供する日何時かは来たらん。されど、充分なる思索を要する時、文芸作品の鑑賞をする時、紙に印刷せる文章でなくば如何にせん。

大学図書館職員長期研修に参加して

参考調査掛 星 政 則

7月20日～8月7日まで図書館情報大学に於いて、全国の図書館員44名の参加で、梅雨明け宣言も取り消され例年になく涼しいなか研修会が開催されました。

学術情報が急速に増大・多様化するなかで、それらを迅速・的確に利用者に提供するためのオンラインシェアードカタログによる全国的目録データベースの構築へと図書館の電算化は進展し、大学図書館の大多数が学術情報センターとの接続を検討しています。共同分担目録の責任の一端を担っている個々の図書館では、職員の研修・入力基準の習得が必要であり、センターにあっては研修の機会・内容の検討等目録作成者の育成が急務であります。

今後、利用者の求める学術情報は、図書・雑誌

に限らず、統計のデータ、実験結果、図表、数表等、学術研究に必要なさまざまなデータ全てが対象となり、情報量の増大、出版までの時間や経費のかかり過ぎは、冊子体から電子出版へと出版形態をも変えようとしている今日、大学図書館のあり方やサービス活動までも大きく変化してくることが予想されます。

また、今日一億五千万冊とも言われている大学図書館の蔵書とこれら資料の遡及入力計画を具体的に実現させることが大きな課題であり、多くの利用者の要求と期待に応えられるネットワークの形成が強く求められているのだと痛感しました。

研修において御指導いただいた諸先生方、また、何よりも三週間お世話いただいた図情大の皆様は心より感謝申し上げます。

第42回

東北地区大学図書館協議会総会

9月24日25日の2日間、36館の参加を得て秋田市で行われた。全体会議では学情システムへの参加に向け、未参加館にあっては設置者側の認識を高める努力の必要が強調された。一方、会誌については次号より“特集テーマ”を定め内容の充実を図ることとするなど熱心な意見交換があり有意義であった。国立部会では、学情センター目録システム講習会を東北地区内で実施するよう同センターに要望することとなった。また、本年3月定年退職された遠藤一夫（日大工図前事務課主任）相原敬三郎（東北大医図前経理主任）桜田俊一郎（同前事務長）3氏の表彰式があり、永年に亘る館界への御貢献に対し表彰状と記念品が贈呈された。

なお、本協議会の事業として編集作業を進めていた「東北地区大学図書館所蔵新聞目録第2版」が完成し、当日参加館に配布された。本版では1969年初版以降加盟館増加等による所蔵状況の変動が著しく、収録タイトル数で2.6倍に達した。本目録は所蔵館調査だけでなく、地区内分担保存のデータなどユニークなツールとしての活用が見込まれる。

昭和62年度第1回東北大学附属 図書館総合研修会

標記研修会は、さる9月18日本館視聴覚室において行われた。今回は宮城教育大学小野四平教授を講師におむかえして、「中国の文化事情」をテーマに講演が行われた。

中国政府文化部の招きで、1984、1985年の2年間北京に滞在、その間中国各地を訪れ、各地各階層の人々と懇談して見聞した中国の現状についてお話された。以前から進められている文盲撲滅運動が期待通り進んでいないこと、及びいわゆる「一人子政策」を国の政策としなければならない社会背景について詳しい説明があり、新聞等の報道から知る中国とは異った中国の側面を理解することが出来る講演であった。なお次回の研修会は下記の日程、テーマで行われる予定である。

日時：11月30日（月）本館視聴覚室、13：30～

○博物館資料をめぐる一博物館と図書館一

講師 仙台市博物館副館長 浜田直嗣

○新しいメディアと図書館

講師 図書館情報大学教授 山本毅雄

第58回 日本医学図書館協会総会

日本医学図書館協会（JMLA）は、今年で60年の年月を数え、その創設は1927年（昭和2年）「官立医科大学附属図書館協議会」として発足し現在に至っている。この間、会の名称を「医科大学附属図書館協議会」と改称し「日本医学図書館協会」となったのは第25回総会（昭和29年）からである。

創設当初は、医科大学5館で発足し、本学医学分館の加盟は第3回総会の1929年（昭和4年）からで当時の加盟館は8館であった。医科大学で発足した協会も第32回総会（昭和36年）から歯科大学等の加盟が認められ、現在では101館が加盟している。

本年の第58回日本医学図書館協会は、去る5月21日、22日の2日間の日程で当番館は東京歯科大学図書館により東京高輪プリンスホテルを会場として、加盟館の館長・主任司書及び名誉顧問・賛助会員等270数名が参加し盛大に開催された。

総会には、文部省から来賓として出席された西尾学術情報課長から御挨拶があり、医学情報の重要性と更には学術情報センターシステムの現状と今後の活動と対応策について決意の程が御披露された。

総会は、第1日「司書会議」、第2日「総会」

として運営されたがその総会の概略について紹介する。

第1日「司書会議」

開会の挨拶に続いて、事業計画の協議、協議題等の審議、*野添篤毅氏（図書館情報大学）の「医学図書館と総合学術情報管理システム IAIMS (Integrated Academic Information Management System)」についての講演に続き会員の研究発表があった。①医学関連雑誌（1976～1985）の大型化とその周辺（防衛医科大学校：増田真美）、②和文誌名の国内欧文誌の Reference における記載法（兵庫医科大学：岩佐美和）、③米国の歯学学位論文（日本歯科大学：和田佳代子）

第2日「総会」

開会の挨拶ののち、会員物故者への黙祷、新任館長、新任主任司書、名誉顧問、永年勤続表彰者の紹介、協会賞、奨励賞の授与があり続いて中央事務局及び各種委員会報告、地区活動報告等、議題審議、記念講演として緒方彰氏（元NHK解説委員長）の「今・世界と日本を考える」について講演があり、次期当番館（大阪歯科大学）を決定し総会を終了した。

*野添篤毅氏の講演内容は「医学図書館」Vol. 34, No. 3 (1987) に掲載。
(医学分館)

記念資料室だより

○先日、わが国の計算機黎明時代に製作された記念すべき本格的パラメترون式電子計算機 SENAC (SENdai Automatic Computer)-1 の部品と展示用パネルが、日本電気株式会社から当室に寄贈された。

寄贈された機械部品は、“パラメترون演算ユニット”と“パラメترون信号変換ユニット”の二つであり、ともに豪華なアクリル製展示用ケースに納められている。また SENAC-1 の全景写真と解説・機能一覧が三枚の美しい展示パネルに納められており、これらは現在当室二階展示室内に展示されている。機械部品の複雑な配線や古い真空管が並ぶたたずまいが観覧者の目を引き、既に展示室内の陳列物の目玉となっている。

さて、この SENAC-1 であるが、昭和33年11月に当時における最高能力をもつ電子計算機とし

て、本学電気通信研究所の大泉充郎教授の指導のもと、電気通信研究所と日本電気との共同開発によって製造された。固定小数点・移動小数点の切替や高速演算回路、先行制御方式など、当時としては極めて斬新な諸機能を有する当機は、以後昭和40年まで本学の多くの研究分野で活用され、本学の研究発展に大きく寄与した、文字どおり記念すべき第一号計算機である。

○東北学院大学文学部長、本学名誉教授長谷川松治先生のご仲介により、故小林淳男先生（元文学部教授、英文学）の描かれた画軸“蓮図”が御遺族から寄贈された。30余年前の作とのことであるが、伸やかな薄墨で描かれた墨画で、枯れた趣のある美しい作品である。文人としても優れた資質を備えられた先生のお人柄をほうふつとさせるものがある。

昭和61年度・中央図書館利用状況の概要

中央図書館の利用状況について昭和61年度利用統計をとりまとめた。これらのうち主要なものを図表にして次に掲載する。

注：表中の〔 〕内は昭和60年度のデータ。

1. 利用対象者数

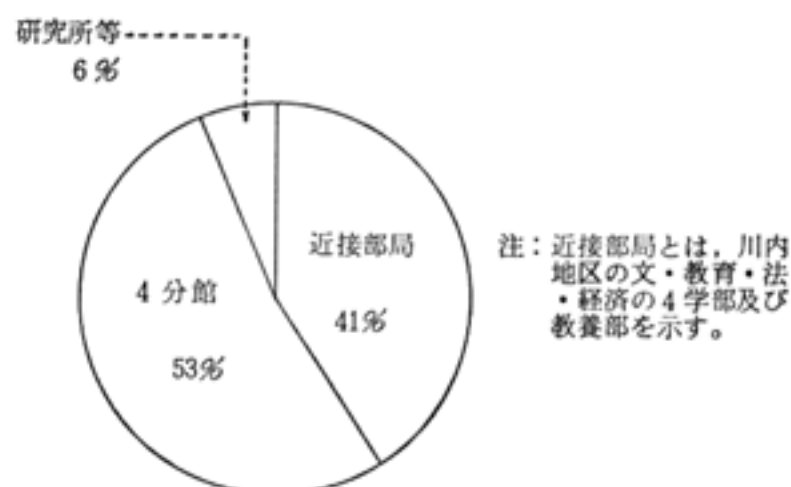
- ・全学総数 19,080人〔18,807人〕
- ・分館（医・北青葉山・工・農学）
利用対象者を除く数 8,961人〔8,818人〕
- ・近接部局利用対象者数 7,795人〔7,564人〕

2. 入館者数（推定）

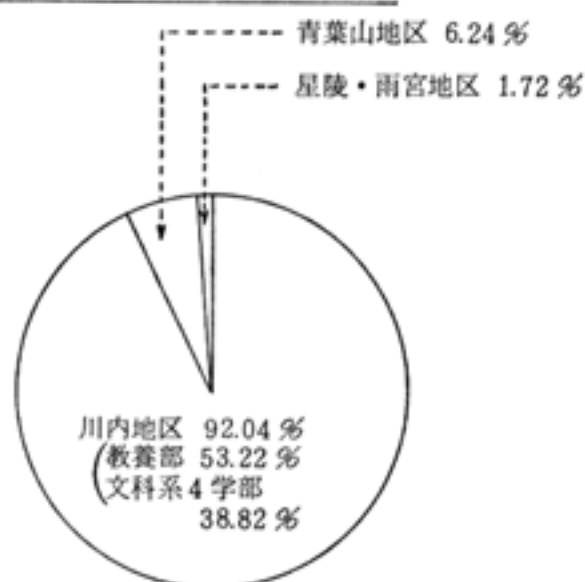
- ・年間総数 473,790人〔491,444人〕
- ・1日平均数 1,586人〔1,695人〕
- ・学生の入館数 436,911人〔460,414人〕

学生・部局別入館者数（過去3ヶ年間の平均）

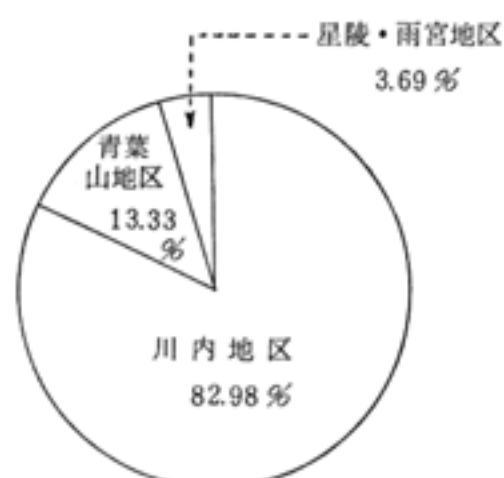
1. i 利用対象者数比率



2. i 学生・地区別比率(全学生)



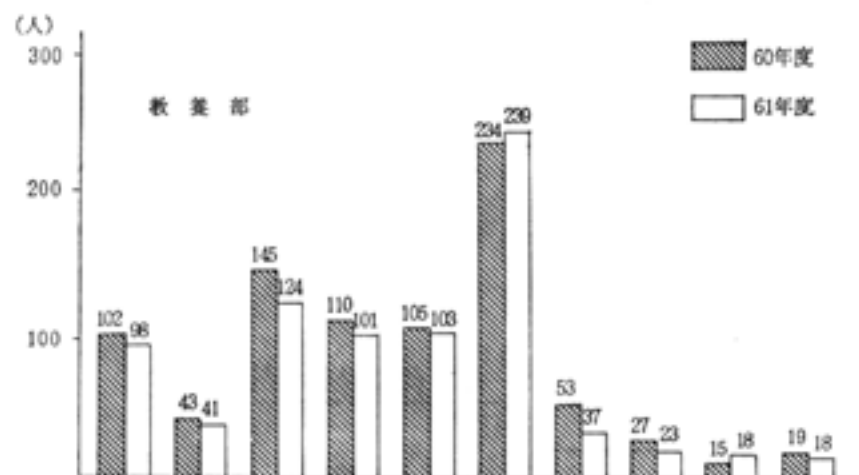
2. ii 学生・地区別比率(学部学生)



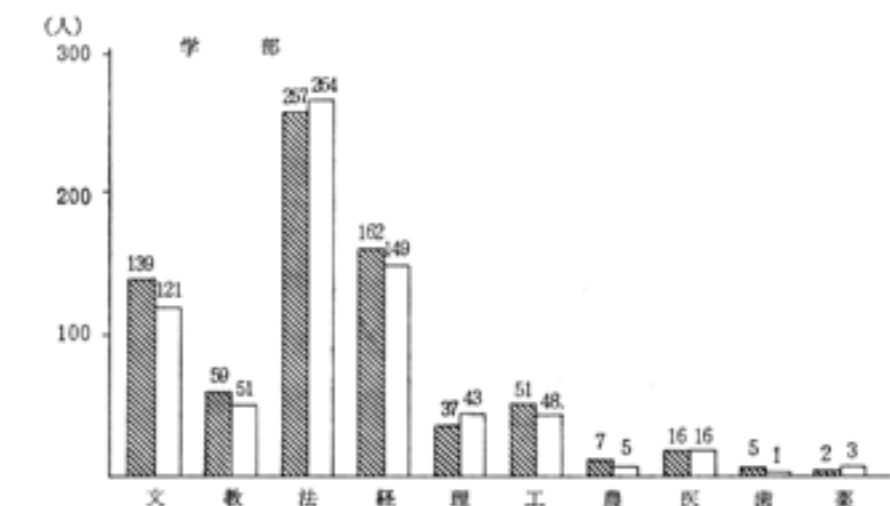
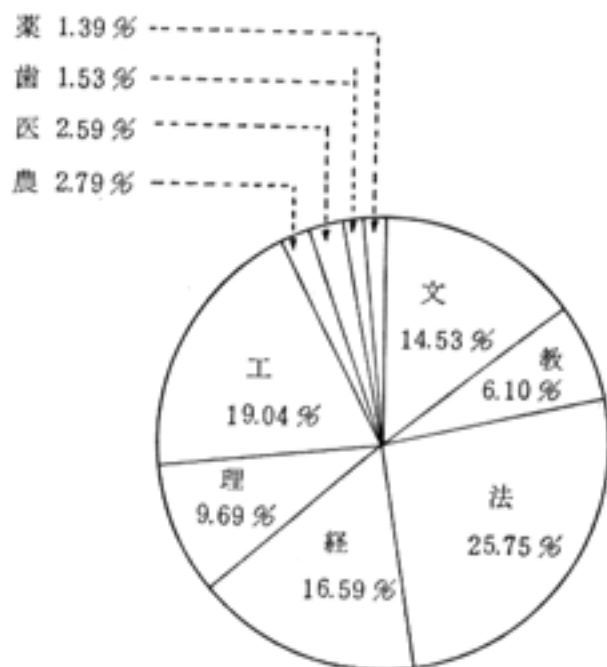
学生・部局別入館者数（過去3ヶ年間の平均）

		文	教	法	経	理	工	農	医	歯	薬	計
教養部	1日平均(人)	98	41	124	101	103	239	37	23	18	18	802
	在籍1人当(回/年)	77	79	75	56	48	38	32	26	31	30	48
学部	1日平均(人)	121	51	264	149	43	48	5	16	5	3	705
	在籍1人当(回/年)	94	96	142	84	21	9	5	9	5	6	40
計	1日平均(人)	219	92	388	250	146	287	42	39	23	21	1,507
	在籍1人当(回/年)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	44

学生・1日平均入館者数



学生・部局別比率(教養部を含む)



3. 閲覧・貸出冊数(閲覧・貸出の合計)

イ) 利用者別

	学 生	院 生	教 職 員	学 外 者	計
開架閲覧室資料	45,179	1,707	927	88	47,901
書庫内資料	8,814	9,707	10,895	3,757	33,173

ロ) 資料別

	新分類	旧片平 (新書)	旧教養	符 文 野 庫	(旧片平) 古 典	個 文 人 庫	経 統 済 計	雑 誌	そ の 他	計
開架閲覧室資料	45,224	—	284	—	—	—	—	1,679	714	47,901
書庫内資料	12,223	5,102	1,688	1,717	1,973	461	450	9,044	515	33,173
計 [冊]	57,447	5,102	1,972	1,717	1,973	461	450	10,723	1,229	81,074
比 率 [%]	70.9	6.3	2.4	2.1	2.4	0.6	0.6	13.2	1.5	100

4. 入庫者数

院 生	教 官	計
4,769人 [5,151人]	2,205人 [2,580人]	6,974人 [7,731人]

5. 文献複写実績

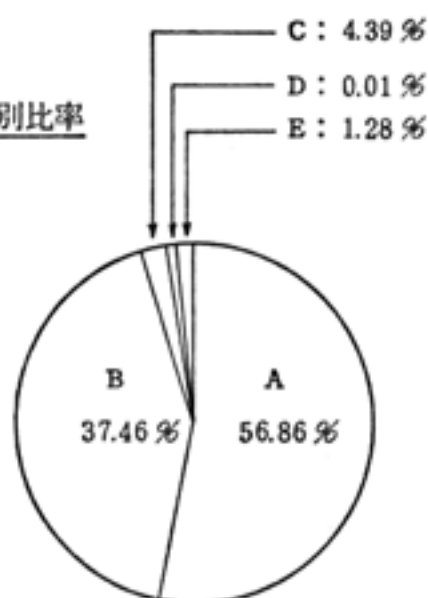
項 目	件 数	枚 数	金 額
学 内	1,074 ^件	13,184 ^枚	546,750 ^円
学 外	2,353	64,425	3,230,263
計	3,427	77,609	3,777,013

6. レファレンス応答件数

区 分		身 分		教 官	院 生・学 生	図 書 室	事 務 職 員	そ の 他	計
学 内	人 文・社 会 系			359 [389]	1,035 [970]	7 [19]	196 [300]	／	4,781 △124 [4,839]
	自 然 科 学 系 (研究所を含む)			1,367 [1,393]	1,696 [1,590]	121 [59]			
学 外				／	／	／	／	2,672 [3,270]	2,672 [3,270]
合 計				1,726 [1,782]	2,731 [2,560]	128 [78]	196 [300]	2,672 [3,270]	7,577 [8,109]

(注) △印は教養部教官分で内数

質問内容別比率

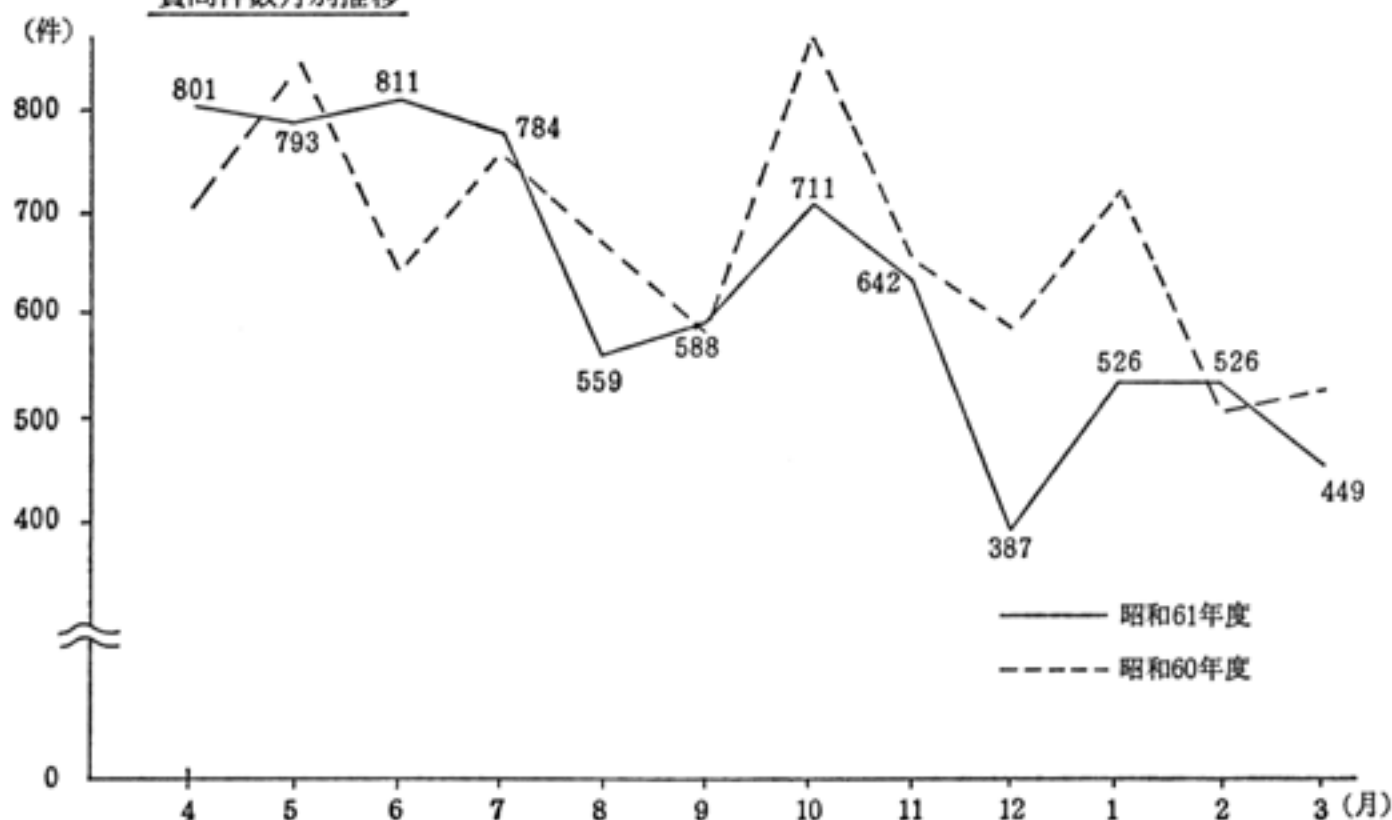


質問手段別比率



A : 文献所在調査
 B : 書誌等事項調査
 C : 利用案内
 D : 文献目録作成
 E : 機械検索

質問件数月別推移



指 定 図 書 に つ い て

昭和63年度の指定図書実施計画は、各学部・教養部の講義担当教官に対し、その指定方を依頼し、提出されたリストに基づき立てられます。これらの指定図書は、受入整理後直ちに本館・分館の閲覧室に配架され、利用されることになりますが、講義に直接関連する必読書として特に指定し

た図書ですから、大いに利用されるよう希望します。

なお本館では、指定図書のリストを作成し新年度の開講までに担当教官及び学生に配布する予定です。

年 末 年 始 の 休 館 等 の お 知 ら せ

本館では本年末及び昭和63年初めに、次のとおり休館又は一部休室をします。

○休 館 12月25日（金）から1月4日（月）まで

○開架閲覧室の休室

12月21日（月）から12月24日（木）まで

（書架の組換え及び配架整備作業のため）

なお、12月21日（月）から1月7日（木）までは、平日17時で閉館します。

人 事 異 動

発令年月日	旧 官 職	氏 名	新 官 職	備 考
62. 9. 1	医学分館 事務補佐員	齋 藤 房 江		辞 職
62. 9. 16	教 養 部 事務補佐員	齋 藤 和佳子	医学分館 事務補佐員	配 置 換
62. 11. 1	総 務 課 事務補佐員	遠 藤 悦 子		辞 職
"		小 泉 麻 理	総 務 課 事務補佐員	採 用
"	医学分館 事務補佐員	青 木 茂		辞 職
"		大 波 邦 靖	医学分館 事務補佐員	採 用

前回発行の人事異動欄の氏名に誤字がありましたので、訂正します。

對島庸二 → 對馬庸二

東北大学附属図書館報「木蓮子」 第12巻 第3号（通巻第47号）発行日 昭和62年11月30日

編集委員長 芳賀 博 編集委員 中島 甫、湯本一義、佐藤博子、高橋 京

発行人 松川 衛 発行所 東北大学附属図書館 仙台市川内 電話 代表 222-1800（2403）